

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13170

研究課題名(和文)比較宗教美術史学の国際ネットワーク構築に向けた基礎的研究

研究課題名(英文)Basic Studies on Comparative Religious Art History for Constructing an International Research Network

研究代表者

秋山 聡 (Akiyama, Akira)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：50293113

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文): 本研究は近年の美術史学において等閑視された観のある比較宗教美術史的研究を日本から発信し、活性化させるために国際的な研究者ネットワークの基礎を構築するものである。その方策として、有効なタームの抽出に務め、以下の用語リストを作成しえた。宗教美術作品の寄進・勸進等 作品の機能及び儀礼との関係 聖性付与の諸相 寄進者像 聖なる存在の表現可能性 彼岸の表現 開示と隠蔽の諸相 聖地と造形との相関性 修行の補助手段としての造形 宗教美術作品における美醜の概念 宗教の世俗化の諸相 世俗行事の宗教性等 宗教運動・改革における造形の役割と変化 造形物への聖性価値の付与ないし排除 女性寄進者と女性像

研究成果の概要(英文): The purpose of this research project is to construct an international research network for comparative religious art history. In order to revitalize this kind of approach we listed suitable terms for research as follows: 1:Donation or Fundraising of works,2:Function of works, 3:Ways of adding Values, 4:Images of Donors,5:Ways of Visualizing of Sacredness, 6:Image of the Hereafter, 7:Exposition and Concealment of Images, 8:Interrelationship of Holy Sites and Images, 9:Images as Devices of Ascetic Practices, 10:Beauty and Ugliness of Religious Images, 11:Secularization, 12:Religious Aspects of Secular Rituals and Feasts,13:Changing of Images through Reformation or Reformative Movement, 14:Value of Religious Images, 15: Feminism Aspects of Religious Images.

研究分野：美術史

キーワード：西洋美術史 宗教美術史 比較美術史 日本美術史 東洋美術史 キリスト教美術史 仏教美術史 聖地・聖遺物研究

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は2007年から2011年にかけてG-COE「死生学の展開と組織化」の事業推進担当者に任せられ、主として国際シンポジウムの企画・運営を務めとし、大小4つのシンポジウム(『聖なるイメージ：彼岸とのコミュニケーションの手段として』、『聖遺物とイメージの相関性：東西比較の試み』、『礼拝像と奇跡：東西比較の試み』、『イメージとヴィジョン：東西比較の試み』)を行ない、その成果を和英両版で刊行するとともに(和文は『次世代人文学開発センター紀要：文化交流紀要』および『死生学研究』に掲載、英文はBulletin of DALSの独立冊子として)、英国、ノリッジのイースト・アングリア大学における世界美術史の泰斗ジョン・オナイアンズ教授の退職記念シンポジウムに参加し、比較美術史についての報告を行った。

この過程で、宗教美術史については個々の領域において多くの研究蓄積があり、また地域的には研究対象も広がってきているにも拘わらず、異なる宗教美術間での比較が十分に成されてきていない実状を体感することとなった。その後も、欧米の研究集会に参加する度に、特定の地域や時代の美術史の枠を超えて、「美術史」として様々な時代・地域の美術を相互に比較し、論じることの必要性を感じ、その方策を考えてきた。その結果、当面、宗教美術という枠組みの中で、しかし、宗派や地域を問わず、各領域のこれまでの研究蓄積を活用して、比較を試みることにより、ともすると細分化する傾向にある美術史学を活性化できないかと考えるに至った。

2. 研究の目的

研究代表者自身、しばしば、仏教美術史研究の成果にヒントを得て、中近世キリスト教美術研究を展開してきた。地域・時代が異なっても、宗教的用途のために制作された造形物には、思いがけない共通点がありうるものである。従来の研究は、ともすると造形物の外形的類似に重きを置きすぎてきた観が否めない。そうした中で、1990年代フリードバーグやベルティンクにより呈示されたキリスト教美術研究における新たなアプローチは、造形物そのものではなく、その機能や作用あるいは周辺環境への考察の重要性を明らかにした。先述のCOE関連シンポジウムにおいては、そうした観点からの主として仏教美術とキリスト教美術との比較を試みたところである。そうした実践から浮かび上がってきたのは、比較という手法は、それによって何らかの結論を導き出そうとするよりも、そのプロセスにおいて相互に学問的な省察を惹起することが多いということであった。本研究においても、比較の対象となる美術、それぞれの研究に新たな刺激を与えることを重視する。

加えて、これまでの国内外の宗教美術史研究者といろいろな形で接してみて痛感され

たのは、相互に論じうるに足るさまざまなテーマやトピックが数多くあると思われるにも拘わらず、個々の領域における専門研究に集中することが重視されがちで、有意義な比較研究があまりなされてきていない、という点である。しかし、多少とも論点を明示すると、盛んな議論に発展することがしばしばあった。そこで、本研究では宗教美術の国際的比較研究の発展に資するに有効なトピックやテーマを可能な限り抽出し、議論の展開可能性をはかり、その上で、有効な国際比較を行いうる研究者ネットワークの基礎を構築することを目指した。

本研究は、異なる地域の宗教美術史研究において蓄積されてきた成果を活用しつつ、効果的に相互に比較するための基盤の形成を目的とするものである。作品単位ではなく、機能・作用や宗教的概念に関わる比較を通して、比較研究に有効となるトピック、テーマ、ターム等の抽出とその共有化の試みを行なうことにより、ネットワークを構築し、研究交流を活発化させることが可能となるものと期待される。いずれにせよ、本研究は萌芽的研究であり、近い将来のより規模の大きな展開への基礎となることを目指す。

3. 研究の方法

まずは、絵巻研究で知られるとともに造形作品の宗教的環境にも造詣の深い高岸輝と、中国王室コレクションや山水画とともに、宗教美術にも通じた塚本磨充を連携研究者に得て、西洋、東洋、日本の宗教美術における造形物の機能、作用、周辺環境等に関わるさまざまな事例を出し合い、比較するに足るトピックやテーマの抽出を心掛けた。また、研究代表者は国外出張の折および海外研究者来日の際等に、積極的な交流を心掛け、宗教美術の国際比較研究についての理解と協力を得るように努めるとともに、将来的な研究ネットワークの基盤形成への協力を求めた。

4. 研究成果

比較宗教美術史の国際的研究の活性化のためのネットワーク形成に資する、異なる宗教間での通有のトピック、テーマ、タームとして、以下の諸項目の有効性を、国内外の研究者との交流、議論を通じて、確認することができた。

宗教美術作品制作の背景：寄進・勸進、収集・管理、移動、改修・修繕、コピー、流通、鑑賞、破壊等

宗教美術作品の機能および儀礼との関係：生動性、説教・鑑賞指導、祭壇・塔頭等、聖遺物容器/舍利容器

宗教美術作品への聖性付与：縁起、奇跡・靈験(譚)からくり、生動性等

宗教美術作品における寄進者像の表現：寄進者・注文主、契約書、結縁、顕示的消費等

本来不可視とされる聖なる存在の表現可能性：可視化の範囲・限界、イコノクラスム等

死や死後の世界、天上世界の造形表現：臨終行儀、アルス・モリエンディ、臨死体験、九相図等

宗教美術作品の開示と隠蔽の諸相：公開と保存、開帳、秘仏・秘宝等

聖地・巡礼地と造形との相関性：陸路・海路の聖地、山岳・秘境、巡礼記・巡礼案内、参詣曼荼羅等

修行の補助手段としての造形：聖像・アイコン、人形、感得像・アケイロポイエトス等

宗教美術作品における美醜の概念：現世の美・来世の美、神・仏の美、醜の力等

以下、具体的に時系列に沿って記述する。

2016年5月、熊野の新宮市において研究協力者の建築史家松崎照明とともに環境問題研究会において『聖なるものの表現をめぐる 美術史家と建築史家の視点から』と題する研究集会を開催し、上記中特に 、 、 を検討した（詳細は以下参照）。

<https://kumanoshimbun.com/wall/searchpage.cgi?target=201605261101>

2016年7月、来日されたジュネーブ大ダリオ・ガンボニ教授と懇談する機会を得、比較宗教美術史の可能性について議論を行い、現代美術研究の観点から多くの刺激を得、宗教の世俗化としての芸術という観点だけではなく、芸術の「神聖化ないし宗教化」という現象にも目を向けるべきことを学んだ。これは上記に「 宗教の世俗化としての芸術、芸術宗教、疑似宗教としての芸術」として加えることができるかもしれない。なお、ガンボニ教授は2019年度に再び来日される予定で、熊野深訪を希望されており、現地での研究集会を企画することとなった。

2016年9月にプラハにおいて国立美術館学芸員のオルガ・コトコヴァ博士と共に、『カール4世1316-2016』展を訪れるとともに議論する機会を得、比較宗教美術史の発展可能性についての意見が一致をみた。東欧圏においては、必然的に西欧圏との比較が従来、必要な手続きとして行われていることもあり、比較の対象を広げることにはさほどの抵抗がないように思われる。実際、広範なパースペクティブから西洋美術研究を展開したポーランドの碩学ヤン・ピアオストツキは、比較美術史の有効性を唱えた数少ない美術史家であり、東欧圏研究者にとって比較研究のネットワーク形成に抵抗が少ない可能性については、2013年に来日された際に議論を交わしたやはりポーランドのヨゼフ・グラブシュキ博士とも意見の一致するところである。

2017年1月、在フィレンツェ、マックス・プランク研究財団ドイツ美術史研究所においてセミナーを行い、神聖ローマ帝国の帝国権標と三種の神器の比較研究について報告した折、同研究所長のゲアハルト・ヴォルフ、

アレッサンドロ・ノーヴァ両氏やウフィツィ美術館版画素描美術館長マルツィア・ファイエッティ博士、フリブール大学ミケレ・バッチ教授、サン・パオロ大学イェンス・バウムガルテン教授およびジェシカ・リチャードソン博士ら若手研究者と議論する機会があったが、やはり比較宗教美術史の基盤形成についての期待や需要を感じたところである。とりわけヴォルフ所長とは、比較宗教美術史に関する関心の多くを共有しており、とりわけ「容器」という点から造形作品を見直す必要性（上記 ）と、造形物の周辺環境として「聖地」を捉える方向性（上記 ）について意見の一致をみた。研究期間内ではなかったが、2018年4月にヴォルフ教授は来日され、後者については熊野の新宮市の環境問題研究会において、前者について東京大学本郷キャンパスで開催された美術史学会の辻佐保子美術史学振興基金講演会において発表され、日本の研究者に大きなインパクトを与えるに至った。

2017年2月、ハイデルベルク大学/トリア大学のダグマール・アイヒベルガー教授が来日され、16世紀末のバイエルン公家における結婚式における造形の役割について詳細な発表をされた。同氏とは折しも江戸東京博物館で開催されていた徳川將軍家における婚姻道具の展覧会を訪れる機会があり、聖俗混交の様子を有する前近代の君侯の婚姻をはじめとする行事・祝祭もまた、比較宗教美術史の範疇において調査しうるということが確認された（ ）として「聖俗混交の行事・祝祭/世俗行事の宗教性/宗教行事の世俗的要素」を加えることが可能かもしれない。

2017年8月末、本務校の業務の一環として学生を鍛錬する体験活動を新宮市で催行した際、大峰奥駆道の行仙山小屋や小雲取越えなどを経験することができたが、宗教美術作品の背景としての周辺環境への顧慮の重要性を改めて知ることとなった。この点、先述のヴォルフ氏の研究関心と重なるところが後に確認された（上記 ）。また、直後に訪れた伊勢神宮では熊野三山との差異が痛感され、山岳と平地といった環境についての顧慮の必要性を改めて認識した。

2017年9月、ベルリンやヴィッテンベルクで開催された宗教改革500周年記念展覧会を訪れる機会を得、宗教運動が造形の歴史的展開に及ぼす影響についても、比較考察の対象となりうることを知り、本研究に反映させる必要性を感じた（「 宗教運動・改革における造形の役割と変化」）。またザクセン地方の小都市デーベルンに遺された可動腕付き磔刑像を実験調査することができ、像を用いた宗教儀礼において、生動性を高める手法の多様性についての認識を新たにすに至った（上記 、 、 ）。またドレスデンにおいては、クンストカンマーとハイルトゥムスカンマー（教会宝物室）との類縁性・親近性を改めて痛感し、同一事物が脈絡・場所次第で

容易に聖にも俗にも組み込まれうることが確認された。「造形物への聖性価値の付与ないし排除、あるいは聖俗混交の諸相」も重要なトピックとなりえよう。

2017年11月、獨協大学の国際研究集会に招聘され、宗教改革期の肖像版画の役割について論じる機会を得たが、その折、ボン大学のアンヌ＝マリ・ポネ教授と研究交流することができた。氏は16世紀初頭のドイツ美術を一種の営業システム(Betriebssystem)と捉え、人文主義を触媒(Katalysator)と形容するが、そこにはやはり聖俗混交の様相がうかがわれ、本研究にも資するところが多々あった。イタリアに比して、ドイツにおける人文主義がよりキリスト教的な色彩を帯びていることも改めて認識され、宗教性の濃度の地域差についての顧慮の重要性(上記)についても考えさせられることとなった。

同月下旬、日本学士院において国際学士院連合大会が初めて開催されることを記念した講演会のためにタフツ大学マデリン・キャヴィネス教授が来日された。研究代表者は同講演会の司会および原稿の翻訳者を務めたが、この折、同教授とともに東京国立博物館における運慶展や根津美術館における仏画展を訪れることができた。西洋中世美術研究の泰斗であるとともに、フェミニズム研究にも造詣の深い同氏との交流、議論からは、比較宗教美術史に関しても多くの刺激を頂くことができた。とりわけ、フェミニズム的観点は、本研究の当初の予定からは漏れており、改めて「宗教美術における女性像、寄進者としての女性」といった項目が必要であることが浮上した。

さて、研究期間内に、相当の規模での総括的な研究集会を開催するには至らなかったが、それに代わるものとして地中海学会の年次大会(2018年6月9、10日)を熊野の新宮市で開催することを計画し、本研究での成果を反映した、比較宗教美術史の色彩の強い二つのシンポジウムを催行する準備を進めた。このために国際熊野学会との協力関係を構築し、2017年11月の同学会シンポジウムに参加し、また2018年3月には新宮市に同学会首脳および新宮市関係者との打ち合わせ、記者発表を行なった(以下、参照)。

<http://www.kinan-newspaper.jp/?p=13991>
<https://kumanoshimbun.com/press/cgi-bin/userinterface/searchpage.cgi?target=201803170101>

このように、国内外の研究者との交流、議論を通じて、当初想定していたチーム(～)に加えて、多少重複するところもあるうかとは思われるが、新たに以下のチームが比較宗教美術史の国際的研究に資する可能性が高いものとして浮かび上がってきた。

宗教の世俗化としての芸術、芸術宗教、疑似宗教としての芸術

世俗行事の宗教性 / 宗教行事の世俗的要素

宗教運動・改革における造形の役割と変化
造形物への聖性価値の付与ないし排除、あるいは聖俗混交の諸相

宗教美術における女性像、寄進者としての女性

本研究は萌芽的、端緒的な性格のものであり、今後、こうしたチームの有効性は、共同研究や研究集会を通じて確認される必要があるが、すでに2018年度、19年度について、既述のものを含めて幾つか具体的な計画が進行しているのも、本研究の成果と言えよう。特に、新宮市の国際熊野学会および環境問題研究会との協力体制は今後も維持され、さらなる発展が期待される。2018年6月9日、10日に開催される地中海学会大会における比較宗教文化的シンポジウム二つの他にも、2019年度には、ダリオ・ガンポーニ教授を迎えて、東北学院大学と共同での研究集会を企画する運びにも至った。また、ゲアハルト・ヴォルフ教授からは、近い将来、上記、

に関わる国際研究集会をイタリア、パレルモで開催しないかという打診を受けている。2019年度以降については、さらに東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センターからも、熊野における比較宗教文化的研究を基盤にした研究集会の定期的開催の可能性追求の依頼を受けている。こうした点から、本研究は萌芽的性格という点での当初の研究目的を一定程度果たしたとも言えるだろう。今後の課題は、本研究が抽出したトピック、テーマ、チーム等を中心とした国際研究集会の開催を、本研究による研究期間内に構築された国際ネットワーク(イタリア(ドイツ美術史研究所、ヘルツィアーナ図書館)、スイス(チューリヒ大学、フリブル大学、ベルン大学、ジュネーブ大学)、ドイツ(ハイデルベルク大学、トリーア大学、ハンブルク大学)、オーストリア(ウィーン大学、オーストリア国立アカデミー)、フランス(ナンテール大学、ディドロ大学)、英国(イースト・アングリア大学、セインズベリー日本藝術学研究所)、チェコスロヴァキア(プラハ国立美術館)、ロシア(モスクワ大学)、オーストラリア(メルボルン大学)、米国(タフツ大学、ハーヴァード大学、プリンストン大学)、ブラジル(サン・パウロ大学)、台湾(台湾大学)、韓国(梨花女子大学、東国大学校)、中国(北京大学)、国内(九州大学、名古屋大学、東北学院大学))を通して、世界各地において実現することとなるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

秋山聰、「妻の力 初期近世ドイツにおける共同事業者としての画家夫婦」、『西洋美術研究』19、2016年10月

AKIYAMA, Akira “Relic or Icon? The Place and Function of Imperial Regalia”, in: *Nomadic Object: The Challenge of the World for Early Modern Religious Art (Intersections Vol.53)*, Brill 2017, pp.430-447.

〔学会発表〕(計 3 件)

秋山聰「比較宗教美術史の試み 聖なるものの東西」、『環境問題研究会、新宮市、和歌山県、2016年5月21日

AKIYAMA, Akira “Sanshu-no-jingi and Reichskleinodien: A Comparative Study on Imperial Regalia”, Seminar at Kunsthistorisches Institut in Florenz, Firenze, Italy, 2017年1月25日

AKIYAMA, Akira “Comparing Engraved Portraits of Cardinal Albrecht von Brandenburg: On Differences between Durer and Cranach”, 獨協大学ワークショップ「ドイツ・ルネサンス芸術の研究 ドイツ・ルネサンス美術における革新性(イノベーション)とは何か」(招待講演)(国際学会) 獨協大学、草加市、埼玉県、2017年11月10日

〔図書〕(計 2 件)

秋山聰、小佐野重利、北澤洋子、小池寿子、小林法子『西洋美術の歴史5：ルネサンス - 北方の覚醒、自意識と自然表現』、中央公論新社、2017年4月

秋山聰、『天才と凡才の時代 ルネサンス芸術家奇譚』、芸術新聞社、2018年1月
〔産業財産権〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋山聰 (Akira AKIYAMA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50293113

(3) 連携研究者

高岸輝 (Akira TAKAGISHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：80416263

塚本磨充 (Maromitsu Tsukamoto)

東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号：00416265

(4) 研究協力者

松崎照明 (Matsuzaki Teruaki)

東京家政学院大学・現代生活学部・特任教授